

季刊 連句 第26号

平成元年九月一日発行



季刊連句 第26号 目次

口伝 (南柏雜記 24) 1
 旅三章 I 永遠とものあわれ.....草間時彦..... 2
 「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (V).....東 明雅..... 4

世界俳句大会

「おもかげの紅粉の花」の記下鉢清子..... 8
 「おくのほそ道」の恋句 (講演要旨).....東 明雅..... 9
 半歌仙 紅粉の花笹 白舟 捌..... 11
 膝送り二十韻 蔓手鞠

「蓑虫」付勝練習二十韻 12

豊田ころも連句会

連句の種蒔き由川慶子..... 14
 三河の旅東 明雅..... 15
 歌仙二巻 猿投山 梅雨晴れ 16
 二十韻三巻 夏料理 杜若 赤米 18
 連句のすゝめ斎藤吾朗..... 19

第三十回 猫蓑会 歌仙六巻

捌 市野沢弘子・大窪 瑞枝・坂本 孝子.....20
 杉江 杉亭・中島 啓世・山口みづゑ
 月の句について東 明雅

関口連句教室

歌仙 麦稈蛇杉内徒司 捌..... 26
 百回記念の会東 明雅
 興流連句会 28
 膝送り二十韻 竹落葉
 雁帛往来 29

口伝

南柏雜誌 24

雅

七月十五日、山形市々民会館で舉行された世界俳句大会では、珍しく連句の興行が上演され、私は笹白舟先生はじめ北陽社の皆様と出演した。その出を待つ楽屋でのことである、北陽社の一人で、その日執筆の役をされる内田素舟さんが、私の傍に寄って来られ、

「猫糞は凄いですね、ちゃんと脇のテニハ止めの場合の心得を知って、実行しておられますね」と言われる。私ははじめ、何を言っておられるのか分からず、ハアと問い返すと、内田さんが、「これですよ」と示されたのは、つい先日の青時雨忌で巻いた作品の第三までであった。

妙覚の峯仰ぎ見る五月晴

瓢左仏

俳諧万巻風薫りけり

正江

冷用酒玻璃の器に供されて

千町

内田さんの説明では、脇の句は多くは体言止めであるが、例外としてテニハ止めが用いられた時は、第三の上五を漢字で一続きの単語を出す、これを「五つ文字」とよぶのだそうである。なるほど、その後で北陽社の作品集「北陽連

歌集」を拝見すると、たとえば、

立還る春や又蒔く花の種

日永の足結子らと若やく

揚雲雀茶屋にしはしの憩して

と、脇句がテニハ付けのものは、すべて第三はスミのテニハを切って「五つ文字」となっている。

このような口伝をしっかり守って来られた北陽社の方々、青時雨忌の会で瓢左仏追善の一卷を見られ、脇がテニハ止め、第三が「五つ文字」に感激されたのであろう。

この口伝は、同じ伊勢派でも芦丈先生の流れにはつたわっていない。だから、私も作者の千町さんも、第三は丈高く、大山体で行こうとはしたものの、「五つ文字」などの口伝があるとは、今の今まで知らなかったので、賞められて、何か尻こそばゆく、冷汗が出るような気であった。

たしかに、脇がテニハ止めの場合は、ことに第三の上五文字をテニハを切ってきっちりとしたもので固めると均衡もとれて、格好がよいことは事実である。この青時雨の会の時は、偶然、具合よく行ったのであるが、今後は猫糞の中でもこの口伝を守らせていただきたいと思う。

それにしても、明治の三森松江から八十年、連句は殆んど滅亡に近かった年月を、よく耐えて、俳諧の伝統を守って下さったものだ、改めて北陽社の方々に感謝の辞を捧げたい。

陽山

準一

一法

旅三章

I 永遠ともものあわれ

ヨーロッパの旅から帰ったばかりである。私は毎年六月に海外に出掛けることにしている。六月と決めたのは、その月が用事や行事の少い月であることのほかに、喘息持ちの私には、梅雨を避けて乾燥した土地に遊びたいという生理的要求もあるのである。日頃、日本という風土に棲み、俳句という日本的な文芸に顎までどっぷりと浸っている身にとって、十日でも半月でも俳句から全く離れたところで暮すということは、いろいろな意味でプラスなのである。

今年の旅はスペインに飛んで、マドリッドからバルセロナを廻り、ウィーンからパリに出て帰国というコースだった。各地二泊づつというゆっくりした旅だった。旅行社のツアーに参加したので、俳句とは全く縁のない旅である。

強烈な印象を受けたのはバルセロナのガウディの建築だった。殊に聖家族教会と呼ばれるサグラダ・ファミリア教会はことにそうだった。私が印象的というのは、ガウディの建築ばかりではなかった。百メートルを越す円錐型の四つの塔はたしかに感動的だった。だが、もう一つ、感動し考えさせられたのは、この建築の建つきさつである。

この教会の建築を計画したのは一八六六年である。建築

草間時彦

が始まったのは一八八一年、ガウディが引受けたのは一八八三年、三十一歳だった。この個性的な建築家は、一九二六年、七十四歳、交通事故で没するまで、この建築にかかづらっていた。しかし、半分しか完成していない。現在は、ガウディの弟子達が継承して、工事はつづいている。私が行ったときも、鉄材が吊り上げられ、塔の尖端に近いところの工事が進んでいた。しかし、完成するのは、百年以内ということはないという。資金が集ったら、集っただけ工事をするのでそうである。完成は百年か二百年先になるだろうという。このところ、寄進が多いので進んでいるが、百年はすぐ経ってしまうだろうという話である。

気の長い話である。日本ではとうてい考えられない話だ。しかし、これは、ガウディの建築ばかりでない。歐洲のどこの聖堂でも、何百年の歴史を持ち、建設は百年、二百年を要している。

パリのノートルダム寺院の着工は一六三三年で、二百年近い建設期間を要している。これにくらべると、ガウディの聖家族教会は稚いとさえ言えよう。

マドリッドの郊外のトレドは教会の街である。この街の

カテドラルは一二二六年に建設が始まり、一四九三年に一応完成している。

ここにはカトリックの教会のほかにユダヤ教の寺院があり、回教の信徒もいた。外敵の侵略と戦いながら、この街は完全な姿で現在も残っている。

私はガウディの聖堂を仰ぎ、トレドの石畳の径を歩きながら、ここには永遠が存在することを知った。建築は永遠なのである。

それは聖堂ばかりではない。民家もそうだ。

旅の終りの日に、パリで小池文子さんのお宅を訪れた。小池文子さん、即ちペロニー文子さんは「杉」同人。パリ在住が長い。古い「鶴」の仲間である。ペロニーさん夫婦の住居はナポレオン三世当時の建物だと言う。天井の漆喰の特長があるそうだ。だから、家具もナポレオン三世時代のものである。

私は今度の旅で、古い教会に入るたびに、「平家物語」の冒頭の部分を思い浮べた。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のこたわりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし」

日本人は木と紙の家に住んでいる。地震があり、火事も多い。日本の建築には永遠という感覚はない。日本の建築工事で、百年、二百年をつづけるといふことは考えられない。途中で、地震があったり、火事があったら、それで終

りなのである。

生きている者は死ぬ。形あるものはこわれる。という日本人の諦念は、木と紙の家から生れたのではないだろうか。生きている者が必ず死ぬということから、もののあわれという心が生れたのかも知れない。

西欧の教会を仰いでいる限り、私はもののあわれという感慨とは全く無縁だった。

トレドの近くには、至るところにオリーブの畑がある。オリーブの低木が瘠せた土にしがみつくように立っている。スペインのオリーブは世界の八十パーセントを産するといふ。そして、このあたりのオリーブの樹は千年から千五百年の樹齢があるといふ。雨が少なく、乾いた土地だから、なかなか成長しないのである。そういう樹だから、オリーブがうまいのだ。日本の場合、瀬戸内海の島に植っているオリーブは二十年ぐらいで大きく育つといふ。水が豊かで、土が肥えているからである。ただし、その実はうまくなく、油も乏しい。樹が育つのに千年を要するならば、樹の生命は永遠である。永遠の樹を伐るといふことは、まさに罪悪である。

その点、日本の場合は、二、三十年で樹が育つので、伐ることに罪の意識が乏しいのも無理はない。生命の再生作用が行われるのである。それは春夏秋冬の四季の輪廻と通じていると言ってよいのだろう。だから、飛花落葉を美とする日本の美意識は決して、敗北主義ではないのである。

永遠という思いと「おごれる人も久しからず」とは相容れない。西欧人には諸行無常は理解出来ないだろう。又、木と紙の家に住む日本人には永遠の建築に威圧感を受けるのみかも知れない。そんなことをしきりに考えた。

バルセロナの東にはカタロニアの荒野がつづいている。

そこには、堀田善衛さんが住んで、藤原定家の日記「明月記」についての随想を書いていらっしやる。堀田さんは私の住む逗子の住人である。それが「明月記」について書くにカタロニアを選んだということはどういうことなのだろう。堀田さんの『カタロニア讃歌』を読んだ五年前にはそれは判らなかつたが、今度、スペインに行ってみていくらか判つたような気がした。それだけでも今度の旅は成功だつたと言える。

私はトレドの丘に立って、荒れた野を見下しながら考え

「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (V)

東 明 雅

た。こういう荒野のどこかに、五、六人の日本人が集つて、連句をやってみたらどうなるのだろうか。どんな作品が出来るのであるうか。

日本では想像出来ないような斬新な、しかし、みだれた作が生れるだろうか。それとも、日本でやっているのと全く違わない歌仙になるのだろうか。もし、前者だったとしたら、感覚の柔軟を讃えるべきか、それとも変り身の早さを難するべきか。後者ならば、土性骨を讃めるべきか、それとも閉鎖的な島国根性を悲しむべきか。どんなものなのだろう。

猫蓑の皆さん。いかがですか。スペインでもよい、サラでもよい、乾いた荒野にお出掛けになりませんか。(以下次号)

15

三里あまりの道かゝえける
この春も盧同が男居なりにて

(春。居なり。人情他)

史邦

(現代語訳) 今年の春も、あの盧同のところの下男は出替わりせず、主人の使いに三里あまりの道を通って行く。

(付心) 其人の付。前句の三里あまりの道をかかえた人を説明した句。

(付味) 前句の三里あまりの道をかかえた人の気分、付句の三月に居なりとなって、あと半年または一年奉公することになった人の気分、いずれも何か行先が遠い、のんびりと気永にやりましようといった気分が通いあいうつりあっている。ことにその男が盧同というような茶人の下男とされているので、ますます、春の駝湯とした気分になった。

(転じ) 打越の水前寺を賞翫している人とは身分も境遇も全く違うものを出して、転じている。

(補説) 裏の月の定座(六句目あるいは七句目あたり)を過ぎて、史邦はそのことも念頭にあったと思うが、ここで月を出そうとすると、夏の月では二句前に夏があつて近いし、秋の月を出すと、秋の季語は三句続けることになっているから、十七句目の花の定座まで秋季になり、花が出しにくくなる。さればとて、冬の月を出すと、前句と一つになって道を急ぐ気分になるだろう。それでは「股引の朝からぬるゝ……」の句と同境になる故、春季をもち出してゆつくりした気分にして、改めて次の二句の作者に春季の月と花とを待ったものであろう。

盧同は唐の詩人・茶人として有名で、「茶歌」(「古文真宝」前集)の作者。男は下男・下僕のことであるが、ここで盧同の下男をわざわざ出したのは、盧同に寄せた韓退之の詩に「玉川先生洛城裏 破屋數間而已矣 一奴長鬚不裏頭 一婢赤脚老無齒」と「古文真宝」前集にあるのが、当時の日本人にも広く知られていたからである。江戸時代、僕婢は半期契約で、二月・八月、後には三月・九月がその交替期となり、これを出替りと呼んだ。居なりは出替りせ

ずに、そのまま重ねてその家に奉公することをいう。もちろん、唐の時代に出替り制度があつたわけではないだろうが、盧同に似た隠逸詩人なら誰でもよいわけで、例の「冬の日」の「日東の李白が坊に月を見て 重五」の伝である。

ただ、このところ12の芙蓉の花、13の水前寺海苔など、いずれも茶人このみの景物があるので、いささか同じ気分が続いているという難があるが、下男を出した効果は大で、今までの雅の世界から、俗の世界に転ずることができたのである。

16

この春も盧同が男居なりにて
さし木つきたる月の朧夜

凡兆

(春。朧夜。人情無)
(現代語訳) 今年の春も盧同のところの下男は重年し、園のさし木も、おぼろ月の下に見ると、よくついているようである。

(付心) 其場の付。また天相の付。

(付味) 「俳諧古集之弁」には「かれがさしつる枝の芽出せし風情ならん。居なりにつきたるは句ともいふべし」とあり、「秘注俳諧七部集」には、「其男ノサシタル木トミテ、居ナリト言ニツキタルトハヒゞキ也」と説明している。芭蕉の余情付には、ひびき・匂い・うつり・位などの名目があるが、その違いは微妙で迷うことが多い。

この場合、隠者に召し使われた下男が満足しきって出替

りをしようともせぬのどかな安定した気分が、付句の挿木のついた満足感・安心感に交流し交響しあつて、完璧な詩の世界を現出する。このようなものを普通句いの付けといふ。ひびきの付けとは、もすこし激しい気分の交流・感合をいうのである。

(転じ) 打越が人情自の句であるのに対し、この句ははっきり人情無(場)の句であることに大きな転じがある。その挿木はもちろんその下男がさしたものであろうが、それを表面に出すと、三里の道をかかえているのも、居なりになつてゐるのも、挿木をさしたのも同一人となつて、まづいのである。だから、旧注の殆んどが、下男が挿木する様子と解しているが、これでは折角の凡兆の苦心を無にするものであろう。

このあたりの四・五句は、やや同境に停滞しているように見えるが、細かにみるとやはりそれなりに気分が変化している。打越と前句との間には、いささか俗にくだけたしのかしのんびりした気分が漲っているが、前句とこの付句になると、春もややたけ、すっかり落ちついた安定感と、春の夜の清閑の情が溢れている。このような微妙な気分の変化は、この集の見所の一つであらう。

(補説) 凡兆もこの句を作る時、月と花とをどうするかを考えたに違いない。月の定座はすでに過ぎ、花の定座は次の17である。前句が春であるから、春の月しか出せない。それで前句の盧同の下男の位にあわせ、居なりという語に叶った挿木を選んで、これと朧月とを結んだものである。

挿木のついた春の夜の仄かな息吹きみたいなものが朧月

の夢幻的な気分と相俟つて、お伽噺の世界のような感じを出しており、そのリズムも快い。

花前の句(花の句の前句をいう)は軽く付けるというのが慣わしである。この句は朧夜の園中の景を描いた軽い叙景の句である。花前に植物を出すことはあまり好まれないが、それは高い樹木などの場合は花に障るが、ここはまだ小さい挿木のこと、花に障ることはない。

17

さし木つきたる月の朧夜

苔ながら花に並ぶる手水鉢

芭蕉

(春。花。人情自)

(現代語訳) 月の朧な夜、花と苔むした手水鉢とをならべて見ることのできるこの景色はすばらしい。

(付心) 前句が人情無(場)の句であるから、それに人情の句を付けると起情の付となるが、この句は補説でも述べるように、人情は極めて薄く、むしろ其場の付と見る方がよい位である。

(付味) 「苔ながら花に並ぶる」という幽艶な情緒は、まさに「月の朧夜」という前句のゆたかな句いを移したものである。

(転じ) 打越からの春三句、気分としては大体同じようなものが続いている感じであるが、打越の盧同の下男の句と、この朧夜の閑庭の描写とでは、題材・表現上の変化はもちろんのこと、気分にも微妙な相違が見られる。

(補説)

手水鉢は、普通座敷の縁の外に立てられ、石を穿って手洗の水を入れるものである。この手水鉢は家によって大体立てられるところが一定し、好みによって、あちらこちらに変えられるものではない。

もし、位置を好みによって自由に変えられるものとすれば、それは茶庭の一部などに低く据えられた手水鉢（つくばい、蹲踞）のことであろうか。但し、つくばいを置くような茶庭には、花（桜などは特に）は植えないのではなからうか。また、あまり、茶庭の印象を強くすれば、打越の盧同が茶人であるからその気分に戻るおそれなしとしない。そうなれば、この庭は、別に茶庭と限定しないで、素人の庭いじりのすきな男が、花の咲く木もつくばいも、自由に取り入れて作った庭を想像すればよいだろう。

さらに、花に並ぶるといふ意味を、苔のついたままの手水鉢を運んで、花の咲いた木の傍に並べる庭いじりの実景と説く者が多い。しかし、考えてみると、月の朧夜に庭いじりをするといふのも何かおかしいではないか。尤も、曲齊の「七部婆心録」では、「此比築立の庭ト見立、俄思付の用を付たり。苔ながら花に並ぶる手水鉢トハ、花ながらさしたる山つゝじ也。此辺につくばひ置ばよからむと思つゝ俣に気を苛ち、明日も待はず古手水鉢を掘上、泥も洗はず苔なりに並見るを、手伝ふ男等が気短な隠居也と思ふ様也」と解している。こんな苛った気分が花の賞翫に叶うかどうか、また、この花を山つつじ也と言うのは、曲齊一流の独断と偏見であり、古来、蕉風俳諧では「花といふは桜の事

ながら都て春花をいふ」（「三冊子」）にも背くことにならう。前句の優艶さに相応ずるものが、桜か山つつじかの判定は自ら明らかである。

このところは、手水鉢を花の咲く傍に移したのは事実だが、それはもう以前のことであって、その結果として現在は、花と苔むした手水鉢を並べて見ることのできる景色を楽しんでいる状態だと見る方がよい。

次に、この花の句は、花を従とし、手水鉢を主としている。これは四句隔てた前に「芙蓉のはなのほらくとちる」という句があり、ここでは芙蓉の花が主として描かれているので、それと重複しないための心遣いである。

さらに、この一卷は去来（A）・芭蕉（B）・凡兆（C）・史邦（D）の四吟であり、膝送りのやり方通り、A・B・C・DとB・A・D・Cが繰り返されて来たのである。

この通りに進行するならば、この花の句は当然Aである去来であるべきであるが、ここで始めて付順を変更して、芭蕉（B）になっている。これは去来は発句を取っているから、初折の花を遠慮して、芭蕉に譲ったものであろう。因みに、一卷の中で月・花の句は特に賞翫されるものであるから、連衆で公平に分配されることが必要である。この巻を見ると、月の句は芭蕉・凡兆・去来、花の句は芭蕉・凡兆が取っている。発句も名譽な場所だが、この巻では去来が貰っている。それに対して史邦は月の句も花の句も貰っていない。理由は分からないけれども、史邦が少し可哀そうな気がする。

奥の細道三〇〇年フェスティバル

世界俳句大会

平成元年七月十五日

於 山形市民会館大ホール

「おもかげの紅粉の花」の記

下鉢清子

東北地方五県轡を並べての、奥の細みち三〇〇年フェスティバルは、夫々の工夫のもとに俳句関係の行事を組み込んでいるが、山形市では「世界俳句大会」と銘打って、七月十五・十六日を中心に多くの行事が持たれた。

この中で画期的なものは、東明雅先生のご講演「奥の細道の恋句」と、連句の座の公開であったと思う。

講演前日の十四日に出発した私達は、講演前ながら余裕のひと刻を、山形市内見物に出向かれた先生にお伴をして、最上義光息女駒姫の菩提寺恵称寺を振出しに、千歳山万松寺、陶の里平清水へと一巡する。殊に陶の里のどんづまり天沢窯は、山野草の手入れの良く行き届いた庭に、無欲無心の女主人の振る舞い、隣の桑畑は羚羊の好物で、満足した羚羊の昼寝の場所と聞くと、まことに俗界を離れて仙界に居る気分、心の豊かさは一服の清涼剤となった。夕食は山形牛のステーキ、処女牛四歳ぐらいが食べ頃というおい

しさ。ほろ酔の一行は宿で膝送り二十韻、豊臣秀次事件の駒姫を偲びつつ

駒姫がゆかりの寺や蔓手鞠

を、発句に「蔓手鞠」の巻を満尾した。

千町

翌十五日の関心は、何と言っても明雅先生のご講演と、連句の座の公開場面である。俳諧師芭蕉が新境地開拓のため東北行脚の道々、連衆と巻かれた歌仙の中の恋句の数々を、配布の資料を示しつつのご講義は、参集者を魅了し俳人芭蕉としてはなく、俳諧師芭蕉であることを啓蒙した意義深いものであった。持ち時間は当初二十分と申すで用意万端整えられておられたのに、直前に十五分と申し渡されたとのこと、随分と苦慮されたことと思うが、聴講者はそのようなことは露知らず、名調子に聞き惚れた。

連句の座の公開は、主客を明雅先生、新庄の笹白舟氏を宗匠に、一門の北陽社の人々を含めて連衆七人、司会のNHK・飯窪アナが曾良の扮装とて、墨染の衣に網代笠を被ったの趣向である。少し肥り気味の飯窪曾良に一座が和む。山形は紅花の産地、丁度花も摘みとりの頃に八まゆはきを俤にして紅粉の花 翁Vを、心に明雅先生の発句挨拶、

おもかげも三百年や紅粉の花

明雅

脇句また八蚤虱馬の尿する枕もと 翁Vに思いを馳せて

蚤も蚊遣りも思ひ出の道

白舟

急所々々の先生の助言と解説、ゆとりのある空氣が、飯

窪曾良の軽いタッチの司会と相俟って、舞台の絵屏風前に
連句浄土を出現させた。この楽しい雰囲気は会場を包み、

思いがけない付句が会場から飛び入りしたが、残念ながら
短句に短句の付けであったため、不採用になってしまった。

会場が忽ち大きな座と化すのも連句の効用であるう。帰
途、山形駅で上田五千石先生とご一緒になった。

「明雅先生は名優でしたね。」

と、しきりに感心、良い締め括りの言葉であった。

「おくのほそ道」の恋句

(講演要旨)

東 明 雅

「おくのほそ道」を旅した時の芭蕉は、墨染の衣を身に
まとい、杖をつき、山寺の蟬に聞き入り、高館の夏草に泪
する、まさに自然詩人であり、旅の詩人であり、わび・さ
びの詩人でありました。それは間違のないところですが、
その彼が、旅の途中で作った俳諧を読んでみると、処々で
ハツとするような恋句、浪漫的で、官能的とも思われるもの
を作っているのにびっくりさせられるのであります。

たとえば、那須の翠桃の家で作った句、

・あの月も恋ゆゑにこそ悲しけれ

翠桃

露とも消えぬ胸のいたきに

芭蕉

わが生命よ露のように消えてしまえという綿々として尽
きぬ恨みの情が感ぜられ、若い女性の情熱が激しく、切実
に謳われ、すばらしい恋句だと言わねばなりません。

尤も、叶わぬ恋のため、露のように消えたいというのは、
決して新しい発想ではありません。古くは万葉集以来、古

今・新古今、あるいは伊勢物語から源氏物語と流れてくる
伝統文学の中では、使い古され、言い古されたものですが、

それを俳諧にこのような形で取り入れたのは芭蕉が始めて
でした。

次に芭蕉は須賀川の等躬のところへ

宮に召されしうき名はづかし

曾良

手枕に細き肱をさし入て

芭蕉

とも詠んでおります。この芭蕉の付句はそのまま、閨房
における女性の姿態を描いております。読者はその手枕を
通して女性の顔つき、体つき、動作までも想像することが
できるのであります。まことに官能的な句であります。

次に羽黒山本坊での興行では、

月見よと引起されて耻しき

曾良

髪あふがするうすものの露

芭蕉

これも中古の宮廷、または貴族の邸での遊びの一こまで
もありませんか。源氏物語にでも出てくるような一節が
あります。

このように見て来ますと、芭蕉の恋句は、平安時代の和歌・物語の伝統を受けついで、その気分・情緒をもって生命とし、それを一層、発展させ、洗練させたもので、貞門・談林の恋句が、あるいは詞のあそびとなり、あるいは放埒なものとなつていたのにくらべ、格段の相違が見られるのであります。

墨染の衣に身をやつし、奥州の野を漂泊した芭蕉が、このようにすばらしい濃艶な恋句を詠んでいるという事実、これに対して皆さんは、何かそぐわないという感想をお持ちの方が多いいのではないのでしょうか。

そして、この奇妙な異和感に、最初に悩まれたのが、元東北大学教授の小宮豊隆先生でありました。先生は「芭蕉の研究」という本の中で、「言わば神と人間とが同時に住んでいたようなものである」とされ、わび・さびの詩人と濃艶な句をよむ詩人、この二つが芭蕉の中でどのような関係で住んでいたのかと悩んでおられます。

しかし、考えてみれば、古代から日本文学の主流であった和歌もその中心は恋歌であり、その伝統が連歌・俳諧の中にも流れて、俳諧では一卷の中、必ず一ヶ所は恋句を詠まなければ、その一卷は「はした物」（はんばなもの）として連句の作品とは認められぬという伝統がありました。だから、芭蕉も俳諧を作る以上、恋句は避けられないものだったのであります。

それはたとえば西行法師に熱烈な恋句があり、連歌師の宗祇にはすぐれた恋句があるのですが、誰もおかし、あ

やしいと思わぬのと同じく、俳諧師の芭蕉が恋句を作っても、それは西行・宗祇にならつてゐるまで、決して不似合なことではありません。

しかし、芭蕉の恋句は、この古典の伝統によるものばかりではありません。金沢の山中温泉で巻いた一卷には

遊女四五人田舎わたらひ

曾良

落書に恋しき君が名もありて

芭蕉

などの一句は、彼が旅の途中でみた遊女の姿を写してゐるのでしょう。そう言えば、「おくのほそ道」の本文にも市振の宿で遊女と泊まり合わせた記事が出ておりまして、興味をそそられるのであります。ともかく、このように、現実の世界に題材を求め、それにしおりとあわれを与えたものも交じつております。これはいわば「軽み」の世界でもあり、この旅の中で工夫され、磨かれ、元禄三・四年以後はすっかり、この作風になりました。

このように、さまざまの恋句を残した彼は決して人間世界に背を向けたのではなく、人を愛するように自然を愛し、自然を愛するように人を愛した暖い心の持主だったのであります。

皆さんは彼の俳句（発句）・紀行文のみならず、彼がこの旅で作った俳諧（連句）を読まれることによって、今まで見られなかつた芭蕉の新しい世界に接せられることができるのであります。文庫本の奥についている曾良の「俳諧書留」をおよみになるよう、おすすめ致します。御静聴ありがとうございます。

半歌仙

紅粉の花

おもかげも三百年や紅粉の花
 蚤も蚊遣りも思ひ出の道
 珍しきままに土産を買ひ足して
 良き湯加減に軽き鼻唄
 職退いて仰ぐかりがね今日の月
 野趣そのままに活けし穂芒
 神苑に太鼓のはづむ秋祭
 漫画の面をせがむ稚児たち
 愛想の良さを売込む片笑窪
 許婚など何のものかは
 仁の医師鬼手仏心の額あげて
 戸の隙間から雪の来客
 かまくらは童話の世界冬の月
 全町挙げて綱の引き合ひ
 酔ふほどに一つ覚えの新庄節
 裾より峰にのぼる囀り
 花衣バスで乗込む吉野山
 伸びる奥都に霞棚引く

笹 白舟 捌

東 明雅
 笹 白舟
 浅沼 葛子
 斎藤 孤柳
 内田 素舟
 金沢 苦舟
 富沢比佐女
 素 柳 子 白 女 苦 柳 子 白 素

膝送り二十韻

蔓手鞠

駒姫がゆかりの寺や蔓手鞠
 夏の襖の茅の輪ま緑
 練り上げし館の加減をためしめて
 問はず語りに借景の庭
 漕ぎてみな月の湖心をめざすと
 秋の蚊帳吊りミンシン踏むなり
 クラクション鳴らされてゐてやや寒し
 口付前後しかと齒磨
 ひと昔天井のしみ鄙の宿
 パリー革命二百年なる
 毛衣を中着に教師めねむりし
 撥の在庫がとても心配
 飲めば飲むな飲まねば飲めと強意見
 孫太郎虫売りに来る月
 太夫から鹿恋に落つる色の道
 ゼミの帰りを待って云ひ寄る
 海は噴き山は崩るる世なりとも
 蛇の目の傘が傘立に立ち
 花がたみ入れ子の箱は八角形
 薄葉ふはと桜貝置く

千町 清子
 和子 文人
 徒司 正江
 清町 和人
 和江 司町
 清町 清和
 司町 清和
 和人 清和
 清江 徒司
 文人 和子
 清子 千町

平成元年七月十四日
 於 山形ホテルキャッスル

蓑虫

付勝練習二十韻

東 明雅

切 締 句 投
日 20 月 10

七句目さりげなくお守りだよと犬はりこ

八句目 回教国は酒も御法度

九句目

治定 バザールに水煙草吸ふ男たち

1 バカチョンとひとつ憶えのナマステと

2 音たてて地球の揺れる一日あり

3 礼拝の時もてあます異邦人

4 チャドルから覗く瞳の黒々と

5 次期政権ターバンの色は白か黒

6 毎日を駱駝の背に揺られつつ

7 バザールの賑はひくぐりぐつたりと

8 神殿の壁にきざみしアラベスク

9 デパートの食堂禁煙席のふえ

10 望郷の夢もとだえてカスバ住み

11 支社長は肩書きのみの雑役夫

12 シロッコの続く季節を耐えてをり

13 輪を描く鳩映りくる玻璃の壺

14 天平の豊反りよく鬼瓦

15 天安門もの言ふ民は処刑され

元子 和久

良子 隆秀

昌子 久子

久子 詩子

詩子 治子

治子 雄次郎

雄次郎 妙子

妙子 美鈴

美鈴 正雄

正雄 徹子

徹子 淑子

淑子 美和

美和 よしえ

よしえ 千雪

千雪 澄子

澄子

※が中心であり直し様はないが、15は「もの言ふ」を何かに直せば生きるのではないか。

次に打越にお守りが出ている。お守りは神祇・釈教どちらでも通用する、宗教色のあるものである。尤も、前句の回教国も宗教の範疇に入るだろうが、打越にあつてはまずい。3の礼拝、8の神殿、14の天平の豊などは駄目である。それから打越は恋句でもあつた。4のチャドルから覗く瞳は明らかに恋句であるから、この句も失格である。

さらに裏の折立から室内の様子が三句続いている。前句は内外分からぬが、これにまた室内の景は付けたくない。外の景とした方がよいと考えた。それで9の禁煙席、19の古文書のページくるの二つはともになすぐれていたけれども、この点から落すことになった。

また、打越に犬はりが出ている。犬はりこは玩具で、実際の犬ではないけれども、四足の哺乳類である6の駱駝とはやはり近すぎるのではないか。

次に大打越に制服が出ている。ここにターバンを出すのは、式目では許されるだろうがすこし近いような気がする。それで5も削ることにした。

2はどのような事件を言っているのだろうか大袈裟な表現がおもしろかったが、前句への付味は今一歩か、10は昔のフランス映画、ジャンギャバン主演「望郷」をモデルにしている。この映画は感銘の深いものだっただけに10の外、12そして16もヒントを得ているように思われる。シロッコはアフリカから地中海沿岸にかけて吹く季節風であり、16

- 16 流れ来てここは地の涯アルゼリア 美幸
 17 大時計かたりと針の動きたる 遊
 18 「悪魔の詩」書いて生命を狙はれて 智子
 19 古文書のページくる窓砂あらし 達子
 20 原色のネオンきらめく窓暮るる うせい
 21 赤道を北へか南いづくせむ 鋭太郎
 22 沙漠ゆく四輪駆動日本製 淳子

(応募受付順)

応募二十三通の中、全く前句に付いていないと思われる句はなかった。流石である。しかし、さればと言って全部付けるわけにはいかない。何とか彼とか文句を付けて落さねばならないのは辛い。辛いと言っても仕方がない。

まず、打越の句に障るものとして、七句目は何か物を言っている姿だから、これに障るものは削った。1は「日本人の旅行といえはバカチョンカメラ。それにインド・パキスタン・ネパール・バンングラデシユの旧インド圏では、ナマステを使ひさえすれば、お早う、今日は、今晚は、すみません等、ゼスチャア交えれば適宜通じますので」という註が付いていて、初めて見た時から興味ふかく牽かれ、最初はこれで治定しようと思った。しかし、打越が「お守りだよ」と言っているのに、この句でまた「ナマステ」は障ると考え、残念だったが落した。15も同じである。この句を見た時、時事の句としてすばらしいし、これで行くとうと決心したのであったが、「もの言ふ」がひっかかることを知ってがっかりした。ただ、1はナマステのおもしろさ※

は流行歌「カスバの女」の文句取りである。いずれもおもしろく感心したが、よく味わってみると、打越の気分、情緒に近いのが気にかかる。11も似たようなものが感ぜられる。この際は22沙漠ゆく日本製自動車のように、ちょっと勇ましいのが望ましいが、「四輪駆動日本製」ではあまり即物的である。21は表現に推敲が足りないし、20は前句との付味が問題である。原色のネオンがきらめくと言え、誰でも酒場や女性を連想するだろう。前句はお酒を否定しているから付味が悪いのである。18は時事の句とも考えられるが、ひとところ大さわぎだったこの事件も、今はやや影がうすい。13と17はともに会釈というよりは通句である。通句でもよい場所ではあるが、有心の句でよい句があればそちらを優先したい。

結局、残ったのはバザールを詠んだ句が二つであった。比較するに7の句は、バザールの賑いとそれに疲れはてた自分を詠んでいるから、やや自他半に近いのではないか。同じ自他半と言っても、打越は夫と妻の立場であるから、はっきり転じは出来ているものの、治定の句が、バザールで水煙草を吸っている男たちの群像を描いているので、転じという面から優っているだろう。この句も仔細に見れば、前句の「酒も御法度」というもの字に対して、果して十分に応えているか疑問だし、「水煙草吸ふ」のは、大打越の「くつろぐ」に似ているとも言えようが、イメージがうんと違ふし、屋外の多人数で活気があり、転じは十分と見たので治定した。次は雑で人情の句が欲しい。

豊田ころも連句会

平成元年六月二十日～二十一日

連句の種蒔き

由川 慶子

平成元年六月のある日、明雅先生御夫妻は三河安城駅に降り立たれた。かつては、東洋のデンマークといわれた安城も、今では工業化、都市化が進んでいる。それでも、車の窓からは、日本一の生産高といわれる無花果畑が多く見えた。

赤米のちまきが名物の「小伴天」^{こばんてん}では、西尾市の斉藤吾朗さんの「白桃」、俳画教室のお弟子さん、吾朗さんの大作「赤米伝承」の絵のモデルで、赤米を作っていたらしい鈴木さんとそのお友達、そして、豊田市の「ころも」の連衆がお迎えした。

品位高く捌いていられるであろう明雅先

生のグループ、笑い声の絶えない矢崎藍のグループ、大らかに楽しんだ吾朗グループ、さてその雰囲気は作品にどうあらわれたか？初対面の方々とも心を開いて楽しむという、連句の不思議さを思う一日であった。

翌日、豊田市の北端にある猿投神社^{さげす}の傍にある「棒の手会館」（棒の手というのは猿投地方の伝統芸能である）へ明雅先生をお迎えした。ここは「ころも連句会」が、月一回定例会場になっている所で、広い廊下の大きなガラス戸のすぐむこうは山である。春先には桃の花畑を通して、ここに、集うのである。

ここでは、明雅先生の捌きを、一度も体験したことのない人を優先して、捌いていたゞいた。全く初心の人にも、優しく指導して下さる明雅先生を拝見して、改めて、その道のトップにいられる方のすばらしさ

を痛感し、連句を続けていて良かったと感じを洩らしたSさん。多分、皆、同じ思いだったと思う。

「連句入門」一冊を頼りに、やみくもにあがいていた二年間、明雅先生の御指導をいただくようになって三年、しかし、私個人で言えば、蕉風の何たるかもいまだわからず、さまよっているのが現状である。

三百年の昔、芭蕉の旅の本当の目的は、何だったのだろうか。新庄で、酒田で、連衆はすべて超一流の才能の主ばかりだったのであるか……などと明雅師とイメージをダブらせてみたりもする。

この二日間、明雅先生は、連句の種蒔きに専念されたのだと思った。三河の地に種は蒔かれたのである。幸い、吾朗さん、藍さんというユニークなリーダーを得て、若手・新人の成長に期待できるのではないかと思っている。

連句への思いを新にする二日間であった。

三河の旅

東 明雅

六月二十日、ころも連句会の方々のお招きで愛知県豊田市を訪問した。当日十一時半、三河安城駅に着くと、由川慶子さん、加藤治子さんがお出迎え下さって、加藤さん運転の車で碧南市の「小伴天」というお店へ急ぐ。「小伴天」にはすでに、西尾白桃連句会の斎藤吾朗さんはじめ、水野克宣さん、嶋村博さん、それに且て私が信州大学で教えたことのある小笠原優さんの姿も見えて嬉しかった。その外、安城市で珍しい赤米を栽培しておられる鈴木美津枝さん、それに「あした」の高橋良風さん、ころも連句会の連衆の方々、あわせて二十数名の方が待っておられ、早速、食事をしながら、二十韻を三卓に分けて作る事になった。

その時、斎藤さん作詞・作曲の「連句のすゝめ」が、ギターの弾き語りで発表され、気分が一気に盛り上り、笑声の絶えぬ活気にみちた一座になった。ころも連句会の中心である矢崎藍さんはじめ、斎藤吾朗さんなど、若い方々が中心となっておられるだけに、何かムンムンした熱気が感じられる。私はもう三十年近くも連句復興を目ざしているわけであるが、この日のように燃え上った会を見たことはない。そして、連句を復興させるためには、このような若い方々の熱気が必要であることを痛感した。

その夜は、豊田市水源町の豊龍閣という旅館に一泊、ここでもまた、藍さん・慶子さんをはじめ、阿部都美子さん・石黒正子さん・八木聖子さん・加藤治子さん、それに同行した家内と、豊龍閣の若奥さん朱美さんを交え、計九人で二十韻を巻く。

楯くべて老いの一徹丸太小屋 藍
梟の声冴ゆる月影 治
家路へと急げば火の玉ついで来る 朱美
世の鞭さへもしのび負ふ恋 聖
髭の濃い男を見れば彼に見え 美
暴走族も時に淋しい 藍

右は「川音の幽かにうれし童宿 明雅」という発句ではじまる二十韻の名残の表であるが、この中に生まれてはじめて連句というものを経験した朱美さんの句が二句も入っているのがおもしろい。御当人はとても興味を示され、今後はころも連句会に仲間入りされるとか。こうして若い方々に弘

まっけて行くのはとても嬉しいことである。翌日は豊田市の棒の手会館という所で、今度は始めて、歌仙でお相手することになった。「棒の手」というのは、三河のこの地方に伝わる古い棒術の一つである。「棒の手会」という名前はかねがね承わっていたが、こんなすばらしい近代的設備のある会館とは考えてもいなかったので、びっくりさせられた。猿投山も古い歌枕である。私の発句「棒の手の懸声涼し猿投山」は、この会館で、スイッチを押すと棒の手についでの説明が流れてくる仕掛けになっている。裂帛の気合いを盛った古武道のかけ声が近代的設備をはこる会に響きわたっているのが印象的であった。十時から始めて、中に食事の時間を含んで、十五時には満尾由川慶子さんにまた三河安城駅まで送っていただき、帰京したわけであるが、この二日間、本当に楽しく、また皆さんの熱意が嬉しかった。矢崎さんはじめ、三河の方々に心から感謝する次第である。

杜若三河の旅の人やさし

明雅

◇歌仙二卷

平成元年六月二十一日
於 豊田市棒の手会館

猿^さ投^{なげ}山^{やま}

東 明雅 掬

棒の手の懸声涼し猿投山

再会うれし光る青柿

曝書する子らの絵本もまじりゐて

あまりあてにもならぬ番犬

ビルのかど鋭角に射す月の影

心静かに酒あたたためむ

後の雛十二単衣をきめ込んで

思はぬ人がやいのやいのと

金髪カミの若妻もゐて峽の村

ピアスの揺るるうすき耳たぶ

会議室出でて興奮さめやらす

三%ほどのことから

人の世は裏表あり寒の月

送り狼駅の北口

その昔机ならべし優等生

愛撫アイブされたり蹴キとばされたり

物言へぬ身を恨寝の花ごろも

桜の下に西行のごと

明雅

志津枝

藍

祥子

祥子

次

富佐子

祥

枝

聖

藍

同

聖

枝

佐

藍

雅

次

^{ナホ}春風がはるか黄沙を運び来る

竜笛一声森の社に

黙禱の途中ポケットベルが鳴り

ひるげの仕度てもと軽やか

ごきぶりはごきぶりはいよいよけて行き

海辺の苫屋天草を干す

神経を少うし病んでアルベジオ

間遠になりし閨の語らひ

男色オコロシに溺れるなんて許せない

七十過ぎて自分史を書く

月天心動かぬごとく地はめぐり

谷ヤに失せたる松茸マツタケのしろ

^{ナウ}啄木鳥ツクシの杜ノに小さき家をたて

新人類シンニョウのこの寺の僧

ハンディはシングルだよと高笑ひ

スコッチ二本今日の賞品

住みなれし矢作ヤサキの川に花吹雪

風船飛フナトビばし見はるかす原

聖 藍 聖 佐 祥 次 藍 佐 聖 次 枝 聖 枝 祥

梅雨晴れ

加藤 治子 捌

梅雨晴れの矢作大川見て飽かず

釣糸かすめ泳ぐあめんぼ

半ズボン腕白坊やの声のして

つくるおかずはコーンコロケ

名月の光ななめに連子窓

秋の芝居のちらし貼らるる

そぞろ寒衿かき合はせ急ぎ足

言はせてみたいお前美人と

さりげなくデートスナップ親の前

束子ゴシゴシ洗ふ鍋底

老年の料理教室繁盛し

数珠も入れてる手提鞆に

動乱の天安門に凍つる月

特派員から受けし速報

うちのこが村のはづれに出たと触れ

観光コースで売店も立つ

花万朶修学旅行の人の波

巫女の緋袴揺らす春風

郁子

道子

時代

慶子

治子

好子

郁美子

慶美

慶美

時慶

時郁

慶郁

時慶

時慶

慶美

好美

好郁

郁好

初^ま虹の消え入りさうな山の端

ぶちの飼犬首をかしげる

一区画三十万の墓地を買ひ

ロールスロイスのお迎へが来て

あざやかに茶筌捌きの風炉点前

入歯は延期歯痛こらへよ

外出に未っ子だけを供につれ

思ひのたけをキャンバスに塗る

不倫ばれ言ひ訳の種使ひきり

隣り近所が立てる聞き耳

月蒼く尺八の音の澄み渡る

妖怪変化古都の冷まじ

烏^ま来て軒の干し柿ついばみぬ

暴走族にモニター制度

無農薬野菜の籠の広げられ

柱時計のふりこせはしく

昇格の辞令ふところ花吹雪

のどかに酌まん「菊石」の酒

美同慶時郁美同時治美同時治美同好美同時治

平成元年六月二十日
於 碧南市小伴天

夏料理

東明雅捌

杜若

矢崎藍捌

赤米

斎藤吾朗捌

小伴天心づくしの夏料理

床に活けられ匂ふ山百合

ギター弾くポリリズムいっばい響かせて

広い平野を楽しドライブ

赤米の真紅の芒を照らす月

温め酒を酌みかはず仲

文化祭信濃乙女の話など

戒壇めぐり鍵に触れざる

このごろは犬を飼ってと子がせがみ

パート支払ひ消費税ぬき

田安の続き泣く人笑ふ人

ひっぱってくる外国の城

冬の月背にして三三七拍子

ミンクのコート買って頂戴

灰色が引いて桃色就任す

辻棲あはずための出鱈目

老病の挙句は頑固一徹に

古池の中群るる藁の子

琴の音の澄める毛氈花吹雪

鶯餅に春惜しむなり

明雅

良風

時代

千賀子

美津枝

かはる

優

好

東郁子

代

風

代

風

好

優

る

賀

優

枝

郁

杜若三河の旅の人やさし

宗匠迎へ万緑の山

厨房は大釜に湯をたぎらせて

ちかごろグリーな塗りの高杯

よつちゃん見たあの月は澄み渡り

紅葉のやうに頬染める君

秋大漁刺青の背に惚れさうらふ

棚尾橋までさかのぼる潮

町内は血縁割って選挙戦

オバタリアンもぶっ倒れたる

ウォッカはインフルエンザの薬とて

満月も凍て犬の遠吠え

耳ふさぐ男の息のやはらかく

春画のとほりやってみようよ

宰相は言葉つまらせただ撫然

天安門に散りし学生

かずかずの身の上話屋台店

いつしか止みぬふらここの音

城跡に城建つる夢花爛漫

春惜しみつつ歩む細道

明雅

藍

聖子

正子

ミチエ

周

朝

けい

よしお

朝

い

正

聖

藍

周

聖

朝

正

お

エ

赤米に鰻を待つや小伴天

佳き日佳き人集ふ梅雨晴れ

夏帽子野外ホールに置かれるて

三毛のっそりと塀に現れ

月あかり桐の木の間にすかし見る

菊の枕をぬらす片恋

河鱸燃ゆる想ひをピンに入れ

一億円も拾ってどうする？

寝違へて後ろも向けぬ泣き笑ひ

カラクリ茶坊主静々と出で

神の留守おまはりさんもでき心

凍てつき昇る上海の月

白髪の源氏の君と老いてなほ

うす目でのぞく看護婦の艶

ちよっとだけしやれてみたんだ銀の鍵

ワインかたむけ聞く弾き語り

復元の古代船いざ出帆す

春告げ鳥は今年また来る

花吹雪石の仏の頭上にも

ブランコゆらりひざにみどり児

明雅

志津枝

慶子

治子

富美子

慶

ひろし

金土

都美子

久世郁子

吾朗

し

治

土

都

富

慶

郁

治

枝

連句のすゝめ

1. 何もかもがせわしない かたよった日々だから
ちよいと俳諧連句でも巻いてみませんか
五七五のイメージに
小粋な七七 からませて
まるで芭蕉のように 古池とびこえた
2. 客の挨拶 発句には ベタ付け脇句の亭主どの
第三転じて てにてらん 四句目 くつろいで
いよいよお出まし お月様
六句目そっと打ち添えて
表六句はおごそかに 捌きも風まかせ
3. 裏に入れば のびやかに そろそろ恋句も二つ三つ
仲を取り持つ雑の句に 時代も折り込んで
大先輩に花もたせ
付かず離れず差し合わず
挙句のはての心地良さ しみ入る披露かな
4. 一度連句を巻いたなら みんな心のお友達
日本の豊かな季節感 過去も未来もとびこえて
一人一人の個性を
集めて流れはきらびやか
まるで芭蕉のように 泳ごう天の河

☆

『連句のすゝめ』（齋藤吾朗氏作詩・作曲）が大流行である。と言ってもまだわが家の中だけの現象であるが、齋藤さんから送っていたいただいたテープを、朝・昼・晩と食事のたびに聞いているうちに、夏休みで遊びに来ている五才の孫まで、すっかり覚えこんで、このごろは時にふれて大斉唱になっている。

この歌は、とても要領よく連句を作る時の心得が詠いこまれており、平易で覚え易い上に、明るいメロデーが魅力的である。A・C・Cでも皆さんに御披露したが、大好評でテープのダビングが次々に行なわれているから確実にひろまっているだろう。

十月半ば、江戸東京自由大学が開校され、俳諧を教えることになっているが、その際にも、この歌詞にそって講義することに決めている。この計画が成功すれば、益々この歌はひろがり、また、それに伴って連句も世間に弘まることになるだろう。

こんな素晴らしい歌を、作詞・作曲して下さった齋藤吾朗画伯に衷心からお礼を申し上げる次第である。（雅）

第三十回 猫蓑会

歌仙六卷

参加者三十六名

平成元年七月十九日
於 関口松声閣

夏帽子 市野沢弘子 捌

梅雨明くる 大窪瑞枝 捌

月の句について

東 明雅

嘘されて一つ買ひけり夏帽子

弘子

高速路貫く街や梅雨明くる

瑞枝

噴水あがる兒童公園

千町

プール帰りの童らの賑ひ

達子

竹煮草裏ほの白くそよぐらん

貞子

白玉にたつぷり鯛をからませて

よしえ

青磁の皿を床の間に置く

良子

絵血時計は長椅子の壁

哲

月の出を待ちて始まる祝賀会

徒司

猫が来て毛並みつくらふ月の縁

房利

鴟の高音に目を覚ます猫

治子

糸瓜の水を掌に受け

志げ子

吾亦紅少女のうなじか細くて

貞

催促の鈴鳴らさるる今年酒

和子

取れた釦が縁結びなる

町

襲名芝居うずら買ひ切り

同

ラプコール切れず切られず長くなり

治

ブラジャーは形状記憶合金で

げ

回転椅子に煙草くゆらす

良

「問はず語り」を碧眼と読む

利

地震津波かかはりなしと伊豆住ひ

司

革命の二百年なる大行進

達

円空仏の笑める古寺

治

空はるばると鶴渡るなり

え

雪見月兔遊ぶと教へつつ

町

口切りの茶事すませ来て窓に月

哲

背を丸めて芋を焼く婆

貞

音をたてずに入る終ひ湯

和

帆船のワインボトルに納まりぬ

町

金剛山蔵王権現峰巡り

げ

漫画の文字でイニシャルを書き

良

疾風になびき舞へる淡雪

哲

読み返す枕草子花の昼

貞

フロートに花のクイーンの片笑くぼ

達

種を浸せる中庭の桶

司

くぐれば匂ふリラの下枝

和

夏帽子の巻

4 青磁の皿を床の間に置く

5 月の出を待ちて始まる祝賀会

6 鴟の高音に目を覚ます猫

6 円空仏の笑める古寺

7 雪見月兔遊ぶと教へつつ

8 背を丸めて芋を焼く婆

10 想ひ出食べて生きてをります

11 つるべ井戸底にぼっかり月の影

12 地酒に漬けし猿のこしかけ

この三つの月の句、どれも独自の気分があつておもしろかった。ことにオ5・ナオ

11の月の句は珍しく、また、打越・付句も

ともにすばらしく感心したが、ウ7の雪見

ナオ
軽やかに鈴の音残し遍路ゆく

うっかり出かける入歯忘れて

どの顔も違ひすぎたる芭蕉像

あなたが好きよ俗でないから

共に見し夢のことあんなこと

美談の陰に少し嘘あり

駅前のレストランカードピットでる

メフィストフェレスと飛ぶ虹の街

朝帰り言ひ訳の数もう尽きて

想ひ出食べて生きてをります

つるべ井戸底にぼっかり月の影

地酒に漬けし猿のこしかけ

ナオ
笙吹けば神立ち給ふ末の秋

平家落人谷の生業

術台に指貫き鉄みすや針

ちりめん雑魚の土産受け取る

築山を巡りし後の花疲れ

春挽糸を紡ぐ縁側

治 いとしきの吾が嬰の涙風光る

町 快気祝に送る羽二重

司 良寛といふ箱書きを真に受けて

町 海底噴火続くぶくぶく

貞 器量良き妻を揃へて臘臍臍

司 悦楽無限欲りし帝王

良 女性誌のカラー写真のテクニク

K トマトにレタスサラダよく冷え

治 もつさりと単身赴任駅に佇ち

町 電子手帳で住所検索

良 ベーカー街二二一B霧の中

貞 山高帽に月のぼんやり

町 蛤となりし雀を悲しみぬ

良 御弊の紙は爺が切り役

貞 堅焼きの自慢煎餅で財を成し

治 句帳傍へに春のうたた寝

弘 花の下チュロのケースの揺られゆく

良 頭ふりふりのぼる風船

利 月は陰曆十一月の異称で月並の月となるか

げ ら月の句としては失格で、ここをちょっと

利 直していただきたい。

え 梅雨明くるの巻

和 4⁺ 絵皿時計は長椅子の壁

利 5 猫が来て毛並みつくらふ月の縁

哲 6 糸瓜の水を掌に受け

え 7 空はろばると鶴渡るなり

哲 8 音をたてずに入る終ひ湯

達 9 7 口切りの茶事すませ来て窓に月

達 10 電子手帳で住所検索

げ 11 ベーカー街二二一B霧の中

利 12 山高帽に月のぼんやり

和 13 5・ウ7の月は、ともに何者かが来て

和 室内で月を見るという形になっており、類

哲 型的な句であるが、ナオ12の月は、前句を

哲 受け、シャロック・ホームズの面影らしく、

枝 題材にも表現にも親しみとおもしろさがあ

え った。

★全国連句大会御案内★

期日 平成元年九月九日(土)・十日(日)

会場 山形県新庄市民文化会館

内容 (一)受付 (二)俳躰めぐり (三)懇親会 (四)芭蕉句碑除幕式

(五)大会(講演・実作)

詳細は市民文化会館(〇二三三・二二一・七〇二九)へ

夏木立

坂本孝子 捌

茅の輪

杉江杉亭 捌

夏木立の巻

影ふかき胸突坂や夏木立

蝉追ひかける児らの足音

麻袴たたむ広間のしづけさに

ワンタッチにて注ぐ熱湯

山脈の重なる果てに細き月

むき干瓢のひらりひらりと

新蕎麦の暖簾かき分け裏通り

ロードショウ観る彼に凭れて

伊達巻はこの娘の母に買ひしもの

三代目ですうちの子三毛猫

サミットに出でし首相の写真集

ひそかにかくす干支のお守

琵琶の湖嶽初めの腕月かかり

鍋奉行るて囲む湯豆腐

出張の土産に配るコースター

超電導で上げし株式

夕闇の楼門映ゆる花篝

盗っ人の見得切つて麗らか

孝子

隆秀

正江

千雪

麻子

江

麻

秀

江

麻

雪

麻

江

雪

孝

麻

雪

秀

老若のしかつめらしき茅の輪かな

氷の旗のひるがへる路地

文机に高く積めるは洋書にて

パイプの掃除念入りにする

欄干に凭れて眺む月今宵

市松屋台虫賣の行く

焼跡にりんごの歌と夢のあり

相性の良き人に恵まれ

内視鏡覗かれてゐる胸の内

宝石店で思案する友

追風を利用して新幹線を止め

越前海岸バスがつぶされ

白々と月光浴びる干大根

寒行の僧あかぎれの足

電線に阿呆鴉の声を聞く

曲がり違へし三つ目の角

ひとしきり花の散りきぬ花の上

兔塊り下萌を食む

杉亭

美保

正雄

昌子

彬風

遊

子

遊

保

同

雄

風

遊

子

風

保

雄

遊

4 ワンタッチにて注ぐ熱湯

5 山脈の重なる果てに細き月

6 むき干瓢のひらりひらりと

7 琵琶の湖嶽初めの腕月かかり

8 鍋奉行るて囲む湯豆腐

9 今宵また悲しき酒の赴任族

10 月の出はやく烏啼くなり

11 銀杏を拾ひ集めし風の後

12 オ5の月、ウ7の月、ともにあまり珍しく新しいものではないが、オ6の干瓢、ウ8の鍋奉行がおもしろいので、月が引き立っている。ナオ8の月も前句ナオ7がしみじみとした句なので、感懐が深い。

13 茅の輪の巻

14 パイプの掃除念入りにする

春の夢また鍵束がみつからず

言語中板痺れたるまま

公立のスポーツセンター案内図

留守の書齋に残る香水

奪はれんものに乳房はあると知る

産院に来るパパの顔して

今宵また悲しき酒の赴任族

月の出はやく烏啼くなり

銀杏を拾ひ集めし風の後

名残の蚊帳に宗匠を泊め

秋遍路見送る禮の深々と

点から線に伸びるジェット機

制服のむらさがが冴え作業員

記憶の中に壊されし町

たばこ屋も米屋も自動販売に

醬油と味噌煮ゆる飯鮎

巻紙をふはりと折りて花便り

墓穴を出て吾と目があふ

永き日をうつらと祖母の居眠れる

双子の娘ピアノ連弾

カラヤンの訃報を悼み独り酌む

人工衛星いくつ空飛ぶ

露天風呂仙人の座といふもあり

南風にまかせ肌もあらはに

短夜のはや明けそめて恨めしく

ボケットベルが不意に鳴り出す

歌舞伎座は丸に鳳凰鬼瓦

最終電車帽子忘れる

「明月記」サラリーマンに読みつがれ

高校野球果てて秋ぞら

豊年を祝ふ太鼓を打ちたたき

頑固一徹ねぢりはちまき

ブーメラン生れた所へ戻るまで

公民館の前の公園

玉堂の画帖に遺す花づくし

霞む山脈遠く望める

5 欄干に凭れて眺む月今宵

6 市松屋台虫売の行く

6 越前海岸バスがつぶされ

7 白々と月光浴びる千大根

8 寒行の僧あかぎれの足

10 最終電車帽子忘れる

11 「明月記」サラリーマンに読みつがれ

12 高校野球果てて秋ぞら

お5・ウ7の月、いずれも捌きの杉亭さ

んの人柄を反映して、おだやかな滋味のあ

る句であるが、ナオの月は変わっている。

「明月記」は藤原定家の日記として有名で

ある。これを月の句として使うのは、いわ

ゆる「虚の月」であろうが、いささか無理

ではあるまいか。

著 雅明 東

連句入門

芭蕉の恋句

中公新書508号

価 五四〇円

岩波新書 91号

価 三二〇円

猫蓑

永田書房
価 二三〇〇円

連句辞典

東杉内・大畑共編
東京堂出版
価 三五〇〇円

蓮池や 中島啓世 捌

睡蓮 山口みづゑ 捌

蓮池やの巻

蓮池や鯉ちらちらと見えかくれ

啓世

睡蓮や開けはなたれし大二階

みづゑ

夏の館の集ひ楽しき

明雅

葭實透かしに都心ビル街

健悟

葛饅頭銀の器にとりわけて

慶二

白靴の子がオカリナを吹いてゐて

清子

リボンをゆらし猫が横切る

澄子

置き忘れたる赤い自転車

好敏

山雲のしづかに隠す十日月

篤子

月出でて版画のやうな山の景

淑子

邯鄲を聞く里の細道

久美子

遅い夜食のテレビロケ隊

香

夜長妻灯一つひとつ消し

二

溢蚊に悩まされつつ彼を待ち

清

枕の中がすぐくあはれで

篤

計りにかける恋と昇進

悟

ルチェルンの湖に投せんこの想ひ

澄

渡されし鍵三つ目を書架に秘め

敏

電信の技師トントンウツウ

篤

季刊連句の表紙猫の絵

清

この頃のほかほか弁当盛り良くて

美

老いてなほ無病息災酒を酌み

淑

大学二年遊んでばかり

美

腹巻めくり見せる弾傷

悟

凝視する蜂の亡骸冬の月

二

月寒し音符の如き枝の鳥

香

ぼっくり寺へ着ぶくれの人

美

つるりつるりと湖のスケート

ゑ

小指立てこれで首相をやめるとか

篤

宰相は選挙演説お呼びなく

清

石のつぶやきせせらぎの音

二

あはて騒がず只管打座なり

悟

花万朵西行庵を訪ね来て

雅

週刊の取材対談花巡り

敏

雀の子にもちよつと挨拶

澄

蝶の舞ひとつ高尾梅の尾

香

オ5は平凡な月だが、ウ7の月は一
種の
凄味があり、次の付句がまたおもしろく、
よく付いている。ナオ11は珍しい月で詩的
であるが、前句の波からどうしてこの発想
が生まれたのか、すこし離れすぎていると
も思われる。

睡蓮の巻

茶摘籠さげ夫婦づれ歌唄ひ

相統困難土地の値あがり

揺られたつつひの住みかは伊豆の郷

休肝日にもこっそりと飲み

天瓜粉湯上がりの子の逃げ廻り

三社祭りの遠き笛の音

ラブホテル行く先ざきの満室で

石部金吉カーニバルキント

一筋の道を究めて五十年

寄せる波より早くひく波

月明かし厩舎に結ぶ馬の夢

新小豆煮る古き土鍋に

松茸をやつと見つけて土瓶蒸し

カラオケ族のはしゃぐ民宿

紅白が終り鳴り出す除夜の鐘

梢の黙に高塔の黙

ライデンの小さき跳ね橋花筏

ぶらんこを漕ぐ兄と妹

干鰯焼き仁清の銘確かめつ

田畑を持ち食ふに困らず

甚六の息子役者を夢に見る

火を点けられて会得体得

抱かれない時のシグナル髪ほぐし

あきらめきれぬ年上のひと

辞を低く夏期学級の打合せ

出前の蕎麦の空のどんぶり

パソコンを打てばピポピポピポ

株の市況も諳んじるほど

隈もなく千木勝男木を照らす月

棚にゆれるる糸瓜瓢箪

巴里より秋のファッション便り来て

帝王なりしカラヤンの逝く

銭湯のまた消えてる裏通り

ひいふうみいと風船をつく

何もかも忘れて花の現在に居り

夕づく空にかかる初虹

悟

淑

香

清

淑

香

敏

同

清

悟

清

淑

香

敏

清

悟

ゑ

淑

4 置き忘れたる赤い自転車

5 月出でて版画のやうな山の景

6 遅い夜食のテレビロケ隊

6 腹巻めくり見せる弾傷

7 月寒し音符の如き枝の鳥

8 つるりつるりと湖のスケート

10 株の市況も諳んじるほど

11 隈もなく千木勝男木を照らす月

12 棚にゆれるる糸瓜瓢箪

オ5の月は前句によく付いて近代的な月

夜の景を描いている。ウ7・ナオ11ともに

通句的な月の出し方である。次の付句、ウ

8は景はよく分かるが、ナオ12はすこし手

軽すぎる付けのようだ。

武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、
九月十日(日)までに一卷につき三部ずつ呈出されたい。
応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

百回記念の会

歌仙 麦稗蛇

杉内徒司 捌

東 明 雅

麦稗蛇ちよいと出したる紅い舌

烏瓜咲く庵の入口

師の蔵書紙魚も親しき心地して

ミルク濃目にクツキーをそへ

月天心ママアタッカー決まる技

夜学子急ぐ路地の靴音

新涼に生きとし生けるものあり

松緑ひばり惚ぶこのごろ

気が付けば独酌かさね吟醸酒

折重なつて投餌くふ鯉

浮橋を渡る覚悟でついで行く

一心同体お財布は別

おえら方およびかからぬ選挙戦

のっぺらぼうと雪女郎の月

湯婆を胸にかかへて今晚は

ブノンペンより難民の船

教会の鐘の響きて花ぶぶき

ここの名物菜飯青饅

明雅

正江

千町

郁子

清子

あかり

和久

まさし

文人

徒司

久

町

郁

雅

江

郁

雅

雅

月の第一日曜の午后一時から、必ず関口の芭蕉庵で興行される関口連句教室は、七月二日に百巻目の作品を首尾した。この日は記念すべき日だというので、いつものように二席に分けず、会の創始者である杉内徒司さんに、一席で捌いていただくことになった。

ちようど、その前日が駒込富士詣の日で、浅間神社で麦藁の蛇を買った連衆の一人、文人さんが、珍しいそのお守りを持って来られた。発句はそのかわいらしい蛇の舌がちよろりと覗いている有様を言ったままで、決して他意はない。正江さんの脇も胸突坂の入口に生えかかっていた烏瓜の花のあえかな姿を描いた囁目の句、挨拶はその中に籠っている。

千町さんの第三に、四句目は軽く打ちそえて、月の定座は一転した動的な句、それに夜学子の靴音と表を無難に切りぬけ、裏の折立の丈の高さに一同感心し、まさしさん得意の演劇がらみの句から、文人さんの吟醸酒、そして徒司さんの庭前の風景で無事一順が終ったあとは、恋句から時事の句など出るにまかせて、笑声の絶えぬ賑かな句座にな

◇ 興流連句会 二十韻

膝送り 竹落葉

五十回記念

馬場 彬 風

竹落葉白川溪を渡る橋

果然

鳥の飛び立つ朝の新緑

草舎

連休は家族サーブス専らに

竹無齊

肩の荷下ろしやっど寛ぐ

彬風

月も出づここの地酒を楽しむ

閑堂

速くはなれて秋を満喫

舎

そぞろ寒む襟かき合はず仇情け

然

店の二階に男連れ込み

然

ノルウエーの森はヤングのベストセラ―

風

李鵬やめろと坐るハンスト

齊

夜は寒く故郷の父母目に浮かべ

丘

梟の鳴く村の山寺

堂

亭々と杉は己を失はず

然

杖つく人も背筋伸ばしつ

舎

寄り添へば昔なつかし宵の月

齊

庭の千草を歌ふ同窓

風

舞茸を膳にのぼせて自慢する

堂

棚のケースに飾る紅貝

丘

夢の跡咲き誇る古き城

舎

辿る細道もゆる陽炎

風

平成元年五月二十九日
於 興流会 談話室

「興流連句第五十巻満尾おめでとう。季刊連句に掲載するので、適当に連衆の何方かの文を添えて頂きたい」と。彬風の御報告の手紙をご覧になって直ぐに、東先生から御丁寧なお電話があった。そこで肝煎りの田原竹無齊さんに其の趣をお伝えすると、早速、「戯作一表六句
驥の歩み二万句の蠅あふぎけり 普其角
亀はゆっくり汗の五十里 竹無齊
教ふるは教へられると訓とされて 果然
客のまばらな「やぶ」で息抜き 桜丘
言霊の国に生まれて月と酒 草舎
自然危うき最果ての秋 閑堂

と合作され、あとはよろしく頼むと田原氏庵の柱に懸け置いた訳ではないが、投函されて、その儘、知床に旅立たれた。
まことに恐ろしいお年寄りの連衆である。俳諧連句も、因縁の鎖であろう。この立句は西鶴の大矢数俳諧に、後見した其角の句である。西鶴は東先生のご造詣に縁が深く、

又今から半世紀も昔の、戦前のことであるが、竹無齊氏、彬風の両名共、本郷の或る寺で、富永半次郎と云われる碩学の師に、この其角の句のことを机を並べて承った事があるらしい。その折の御講議では「驥（一日に千里を行く馬）は其の力を称するにあらず、其の徳を称するなり」との論語の章の意を、其角は踏んでいると謂われたと記憶している。
右のように、当時は相識らなかつた田原さんとの御縁も、この興流連句会に参じて、初めて識る事となった。尚この句の詳解は、第六天主宰の今泉忘機氏著「五元集の研究」を参照していただきたい。
このような因縁をさつと畳み込んだ立句を選び、表六句を書き棄てる連衆である。東先生のご推薦でお付き合いを始めてから、満五年、全巻膝送り、他に連衆付け廻しの文音歌仙も既に二十八巻とか。
益々御元気で、ご同慶の至りに耐えない。

連句会案内

※ 連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 九四一―一四五

※ 柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マレット下車)

※ A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三四四―一九四一(代表)

※ 猫蓑会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一―九六四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁帛往来

五月六日 大磯の鴨立庵で俳諧興行。一時開会、参会者二十余人、四時終って帰宅。

五月十四日 故清水瓢左氏の一周年忌とて、

深川の芭蕉記念館で青時雨忌を興行。猫蓑からは脇宗匠に豊田好敏氏、副司に福井隆秀氏、読師に中川哲氏、香元に式田和子氏、配硯に原田千町氏、八角澄子氏、金久保淑子氏が出席され、御苦勞様であった。

五月十九日 山形市で挙行される「世界俳句大会」に連句興行の上演があるので、

NHK学園俳句センターの二宮貢作氏と同行、山形県新庄市に赴き、北陽社主宰笹白舟氏に逢う。

六月十一日 柏連句会吟行で浜離宮に行

き、中の島集会所で四卓、半歌仙四巻首尾。

六月十七日 増上寺の全国連句大会出席。

六月二十日 豊田の「ころも連句会」に招待されて、豊田行。碧南市「小伴天」で

二十韻三巻、宿舍の豊龍閣でまた一巻、翌日、棒の手会館で歌仙一巻捌き、夕方帰宅。

この旅行で矢崎藍さんはじめ「ころも連句会」の皆様、白桃連句会の斎藤吾朗さんはじめ皆様に大変お世話になった。

七月十四日・十五日 山形市民会館で挙

行された奥の細道三〇〇年フェスティバル「世界俳句大会」に出席、「奥の細道の恋句」について講演、また連句の座の公開にも参加。

七月十九日 関口松声閣で第三十回猫蓑会興行、歌仙六巻首尾。

季刊「連句」第二十六号

平成元年九月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方

電話 〇四七二(七五)二一九二

振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 旬岩 田 印刷 所

▽277 柏市豊住一ノ一ノ二二

電話 〇四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

B6判

三五二頁

三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を連び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大編 A5 六八〇円

国語慣用句辞典 白石大編 B6 二八〇円

国語史辞典 林静他編 B6 三三〇円

日本語語源辞典 堀井金以知編 B6 一八〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 卓編 B6 二五〇円

隠語辞典 榎垣 実典編 B6 二八〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井哲編 B6 三三〇円

明治新語俗語辞典 榎島忠夫他編 B6 三三〇円

難訓辞典 中山泰風編 B6 二二〇円

名乗辞典 荒木貞彦編 B6 一三〇円

名数数詞辞典 森 謙彦編 B6 四三〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6 二八〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木常三編 B6 五八〇円

類語辞典 鈴木・広田編 B6 一八〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6 三〇〇円

表現類語辞典 藤原孝一他編 B6 四八〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B6 二九〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2